

II. 特別講演

甲状腺機能低下症 Update

— 甲状腺の異常発生による疾患群 —

群馬大学大学院

医学系研究科小児生体防御学

鬼形和道

2 胃癌の異時性肝転移に対する切除術施行後、腹膜播種に対し Paclitaxel (PTX) が奏効した1例

佐野 文・宮下 薫・藍澤喜久雄

鳥越 貴行・森岡 伸浩

燕労災病院外科

症例は62歳、男性。2003年1月20日、胃全摘、2群郭清施行 (ss,N1,P0,H0) stage II。2005年3月、肝S8に3cmの転移を認め、3月31日肝部分切除術施行。4月15日よりTS-1 100mg/day内服開始。11月22日、腫瘍マーカーの上昇認め、TS-1 80mg/day (2投2休)、PTX 90mg/body (Day 1, 8) 開始。12月2日、CTにて食道空腸吻合部近傍および Schnizler 転移を確認。2006年5月23日、TS-1/PTX, 9サイクル終了。5月26日、CT上腫瘍の消失。9月現在14クール施行しているが再発傾向はない。

【まとめ】進行・再発胃癌、特に腹膜播種に対しPTXを用いた化学療法が奏効した症例を経験した。

第263回新潟外科集談会

日時 平成18年12月2日(土)

午後1時～4時

会場 新潟県医師会館

大講堂(3F)

1 ヘルニア腫瘍で発見された進行胃癌の1例

小川 勇一・蛭川 浩史・田所 央

佐藤征二郎・多田 哲也

立川総合病院外科

ヘルニア嚢内に胃癌腹膜播種巣を認めた1例を経験した。症例は60歳男性、左鼠径ヘルニアの診断で手術を施行。ヘルニア嚢を開放すると、腹膜に多数の結節を認め、病理組織学的検査で腹膜播種と診断された。術式は Ilio-pubic tract repair を行った。術後行った上部消化管内視鏡で、2型進行胃癌を認めた。CDDP, TS-1による化学療法を施行後、試験開腹したが腹膜播種の遺残があり、原発巣は切除せず化学療法を施行中である。

自験例は転移性ヘルニア嚢腫瘍に分類され、頻度は鼠径ヘルニア手術の0.07%と稀である。鼠径ヘルニア嚢の注意深い観察が重要と考えられた。

3 胃癌穿孔4例の臨床病理学的検討

小川 洋・遠藤 和彦・下山 雅朗

清水 孝王・木村 愛彦・中川 拓

小野 貴史・白戸 圭介

厚生連秋田組合総合病院外科

1997年4月からの約9年間に当科で施行された胃癌手術総数508例中、穿孔例は4例(0.8%)である。4例とも術前診断は胃癌であり、2例は膿瘍形成を伴う限局性腹膜炎の状態以待機的手術を施行。2例は汎発性腹膜炎で緊急手術を施行した。主たる占拠部位はLM領域が2例、L領域が2例で、4例すべてに幽門側胃切除D2を施行した。肉眼型は全例2型で、組織型は低分化腺癌3例、中分化腺癌が1例であった。いずれの症例も癌部にて穿孔を起こしていたが、最終病期は、2例がStage I Bで根治度A、2例がStage III Aで根治度Bであった。4例とも現在まで無再発生存中である。

【結語】緊急手術、待機手術を問わず、穿孔例で